エッセイ

池の水を抜いたら・・・
鎌倉にて

鈴木　美恵子

２０１６年の７月、友人に誘われて鎌倉光明寺、別名「蓮寺」の観蓮会に参加した。記主庭園の池に咲きほこるハスの花を楽しみに出かけた。そこには「大賀ハス」「キンズイレン」が池いっぱいに咲き、極楽浄土を連想させる蓮池のはずだった。しかし、大きなハスの花と蕾、受け皿の様に大きな葉があるのは池の3分の1ほどであった。

月日が過ぎ、翌年の２０１７年、何気なくテレビを見ていたら「緊急ＳＯＳ！池の水全部ぬく大作戦」、という変わった番組をテレビ東京でやっていた。その中で、正月のスペシャル番組として鎌倉光明寺の池の水を抜く、と予告しているではないか！

何でも、池のハスが急激に減少して来ているので何か原因がないか調べて欲しい、とお寺の方から依頼があったと言う。激減した原因を調べて、元の様に綺麗な蓮池を取り戻したいと言う。私も興味津津、何故少なくなってきたのか知らずにはいられない。

作業が敢行されたのはその年の１２月、放送は翌２０１８年１月２日だった。バラエティー芸人、スタッフ、専門家、多くの小学生に加えお寺の僧侶も作業服に着替え賑やかに大々的に行われた。強力バキュームカーで、水やヘドロをどんどん吸い上げていく。参加者は皆、着衣も顔も髪の毛までも泥にまみれ、それでもワーワーキャーキャー、童心にかえったかのように泥の中から魚を捕まえていく。やがて少しずつ池の底が現れてきた。

いたいた、居たではないか‼

エビ、カニ、外来種のミシシッピアカミミガメを含む多くのカメ、いるはずのない８０センチを超えるソウギョ、１０匹以上のウナギ、多数のメダカなど２６００

匹以上が住み着いていた。特にソウギョがハスの根などを食べ荒らし、可哀想にハスは生育できなくなっていた。何故、いるはずのない生物がこの池にいたのか？

カメの場合、縁日で売られているが大きくなると育てられなくなり、池に放されることが考えられる。おそらくソウギョもそういう事ではないだろうか。　だがウナギは何処から入り込んだのだろうか、不思議である。

1日かけてヘドロと格闘し外来種を駆除、在来種を池に戻した。こういう「かいぼり作業」は昔から池の管理としてやっていた事である。だがメダカのような在来種は、いきなりそのままの水道水に入れては死んでしまう。それらがどうなったのか気掛かりではある。作業後、専門家によってハスは植え直された。しかし、元々自然界に生存している生物にとって、綺麗すぎる池はかえって住みにくくは無かろうか。私には魚の気持ちは解らないが。

さて、鎌倉光明寺とは、鎌倉時代１２４３年創立の浄土宗大本山で山号を天照山、ご本尊は阿弥陀如来、開山は記主禅師、開基は鎌倉幕府第四代執権北条経時と言われている。

記主庭園の池に咲く「大賀ハス」とは、１９５１年植物学者でハスの権威者でもある大賀一郎博士と、千葉市検見川の地元のボランティアの方々の協力によって発掘されたものである。当時の花園中学校の一人の女生徒が、地下6メートルの泥炭層の土をザルで振るっていた中に、一粒のハスの実を発見した。そうこうして合計3粒の実が発掘され、大賀博士によって発芽育成された。それは日本各地をはじめ世界各国へ根分けされ、「世界最古の花、生命の復活」と国内外でニュースになり「大賀ハス」と命名されたのである。

蓮池観賞後、私たちは古代中国から伝わる「象鼻杯」という風流な楽しみを経験した。「象鼻杯」とは、ハスの葉の茎を途中で切り落とし、葉を杯代わりにしてお酒などを注ぎ、茎の中を通って出てくるお酒を直接吸うようにして飲むものである。その後、大聖閣では抹茶席に参加し、二階ではご本尊である阿弥陀三尊像を拝観する事ができた。大聖閣からは、記主庭園や本堂などが一望の下に見渡され、屋根の向こうには相模湾が静かに横たわり、それはそれは素晴らしい景色であった。

楽しかった1日を過ごし、私達は2年後3年後の蓮池を思い描きながら、夏の鎌倉を後にした。

（終）

〔参考〕

テレビ東京
ウィキペディア
シティ千葉ー大賀ハス何でも情報館

例会発表の概要

（平成三十年十月～平成三十一年二月）

＊10月1日（月）十月度例会。会場・波止場会館。発表者3名。参加者102名。

▼発表者竹内秀一氏。題「神奈川の古代直線官道について」近年、古代の道で幅が広く直線的な道路があり、全国に張り巡らされていたことが明らかになってきている。この直線官道が、いつ、誰によって、何のため造られたのか、未だ全貌は不明。古代直線官道を探索すると、国道246号と中原街道がほぼ直線で平行して走り相模国府から常陸国府に至り、一部は現在の道路に継承されていることが地図で分かる。竹内氏は「古代道」は「歴史遺産」だと熱っぽく語られた。

発表中の竹内秀一さん

▼発表者吉田友雅氏。題「武田信玄の大将として」信玄は家康・信長ともに恐れをなした人物であり特に家康は作戦・政治面で多く影響を受けたと言われる。「慈悲を忘れの事が肝要である」「適材適所で人材を生かす」「正しき人物の見方」「賢将は五分の勝利を上とす」「人心の離反は一国の滅亡となる」等の視点から信玄の大将としての考え方を検証された。

発表中の吉田友雅さん

会員には信玄ファンも多く、活発な質疑応答が続いた。

▼発表者槙　良生氏。題「幕末、維新、そして明治を駈けた宇和島藩」江戸時代末期、伊予宇和島藩伊達家10万石の8代目藩主宗城（むねなり）は松平春嶽、山内容堂、島津斉彬と共に「四賢侯」と称された。藩政は困難の連続であったが薩長土肥の雄藩と並んで幕末に大いに国政に関与した。この激動の時代を疾風のごとく生き抜いていった姿を流暢な弁舌で説かれた。

＊11月5日（月）十一月度例会。会場・波止場会館。発表者3名。参加者九十九名。

▼発表者春口健二氏。題「神社研究ーその六「古代の祈りと祭り」仏教と仏教建築が普及された時期以前の縄文・弥生および古墳時代の人々が自然災害にもめげずに子孫の繁栄を祈り、互いに励ましあってきた祭りを考古学の資料から読み取り発表された。日本人の心の原点に迫るご講演であった。

▼発表者森岡　璋氏。題「松陰日記を読む」（柳沢吉保伝）柳沢吉保は18歳で家禄530石の家督を継ぎ48歳の時には22万8千石の大老格となる。この異常な出世もあり世評は総じて芳しくないが、その悪評は後世の捏造であり、生類憐みの令と重ねて脚色された歌舞伎や俗書により柳沢佞臣説が流布された。側室正親町町子の日記から、将軍綱吉と吉保の関係、吉保の圧倒的な政治力と影響力を読み解かれた。

▼発表者進藤洋輔氏。題「小机城址を訪ねて」小机城址は現在横浜市民の森であるが、かつては堅牢さと豊かな歴史を抱える見事な小田原城の支城であった。春に行われている「小机城祭り」では鎧兜に身を固めた武者行列が賑やかに行われている。太田道灌が登場する歴史も紹介された。パワーポイント故障にもめげず、熱のこもったご発表であった。

＊12月3日（月）十二月度例会。会場・波止場会館。発表者3名。参加者110名。

▼発表者西山達夫氏。題「田沼時代（後編）～美濃・郡上一揆の果断な処理～」江戸中期は米本位制の政策が行き詰る時代になり、家重・家治治世になると田沼意次が登場し、米に変わる殖産産業を用いた重商主義で治めた。拝金主義

ととられる向きもある。西山氏は緻密な資料を作り、丹念にお話された。

▼発表者植木静山氏。題「日米・日英・日露和親条約の対外的そして国内的な影響について」幕末の日本と列強の国々との関わりを詳細に解説された。幕府が当時どういう政策をとっていたか、どのように対応を行ったかというようなことを述べられた。また安政の大地震でロシアのディアナ号が難破した際に、伊豆で国産の帆船を建造し、５００名の乗員を救った事件をいまの外交に映して興味深くお話しされた。

▼発表者上野隆千氏。題「明治の気骨・田中正造と足尾銅山鉱毒事件」足尾銅山鉱毒事件が法的に解決するのには１００年近くかかったが公害の認識が希薄な時代、政治家・田中正造が立ち向かった。上野氏は現場を訪れ、検証された上でのご講演であり足尾銅山とはどういう所で、どのような事件であったかという真相を分かり易く説明された。当時の田中への国の対応に、国策として銅の生産を奨励する国の焦りをよく感じ取れるご発表であった。

※1月8日（火）平成３１年定期総会ほか開催（ホテル横浜ガーデンにて）１３時より

▼第一部定期総会（出席者委任状含め１７１名中１４３名）。ご来賓は全国歴史研究会主幹・吉成勇様、江戸の歴史研究会会長・高橋倭子様。会長挨拶、吉成様ご挨拶の後、１～９号議案を無事可決。第７号議案の人事異動案は、満場一致で承認。名誉会長・加藤導男（現会長）会長・木村高久（現副会長）副会長・三觜行雄（現常任理事）新任理事・北村邦明、石井昭徳、佐藤猛夫、雨宮美千代　監事・宮下元（現理事）の各氏。

▼第二部新春会員発表会（出席者９９名）。発表者副会長・竹村紘一氏、演題「天下の大器と期待されながらも早世した蒲生氏郷」。信長、秀吉に重用され近江日野６万石から１０年足らずで会津９２万石領主に出世したが、４０歳の若さで没した蒲生氏郷の生涯をご紹介いただいた。最後に歴史研究に取り組む際の文献の取扱いについてもご教示いただいた。

▼第３部新年祝賀会　「つなぐ」ことの大切さをメッセージ映像に表して祝賀会スタート。三觜副会長による開会の言葉に始まり、ご来賓の高橋様にご祝賀を賜り、渡会顧問の乾杯で祝宴開始。アトラクションは岳精流日本吟院の北村雄山氏の詩吟。明治天皇の御製歌「あさみどり」、李白の漢詩「静夜思」をご披露いただいた。途中、当会の会歌を即興で吟じられるなど、普段接する機会の少ない詩吟の世界にすっかり魅了された。会はカラオケタイムを経て全員で会歌斉唱し、無事終了。

※2月6日(水)二月度例会。会場・横浜市開港記念会館。発表者３名。参加者９２名。

▼発表者長尾正和氏。題「大江広元と息子たち・一族の盛衰」鎌倉時代初頭に極めて重大な役割を果たした初代別当、大江広元は生まれも育ちも文官貴族であった。彼には7男4女がいたとされるが、息子たちはいずれも幕府に重用され、武士一族あるいは高級官僚一族に変貌してゆく。中世・近世へとつづく各嫡流家代々の歴史を綴られた。長尾氏は平安末期から幕末まで至る大変長い話を見事に纏められた。

▼発表者蛭田喬樹氏。題「日本は九州出身？」日本書紀によると、イザナキは九州の海で禊をし、アマテラスは孫を九州高千穂に降臨させた。神武天皇は瀬戸内海を遡り、奈良に国を開いたことになっている。日本は全て九州から始まったとされるが、疑問である。

「書記」は日本の古代史を記す「六国史」の最初を飾る書であり、国が作ったものである。国がこのような歴史を書いたのは何故かという観点に立って、蛭田氏は大変に興味深い自説を熱弁された。

▼発表者堀江洋之氏。題「伝説に満ちた陰陽師（オンミョウジ）阿倍清明の生涯」清明を祀る各所の神社は魔除け・厄除けの霊験のパワースポットとして人気を集めている。平安時代、都では疫病や飢饉が蔓延、人々は仏教や陰陽に救いを求めた。平安中期の陰陽師・阿倍清明は陰陽・暦術・天文術に精通し伝説的易占いの名人であった。堀江氏は阿倍清明の生涯を、数多くのポスターを用いながら、誠に丁寧なご発表をされた。